

地域おこし協力隊

日本の少子高齢化により、いくつもの田舎町はどんどん小さくなりつつある。たくさんの若者は仕事や大学教育のため、遠い都市に行く。いつか故郷に帰る人はいるが、すべてではない。しかし、様々な所で若者を田舎の地域に引っ越しさせるように「地域おこし」などのキャンペーンが行われている。このエッセイで、二つの成功例とそれぞれの影響される「混合」を見、評しよう。

まず、海士町を見てみよう。海士町は島根県の町だが、遠い離島にある。当然なことに、超田舎だが、2010年まで、人口は2千4百人の250人以上が海士町に移住した者であった。しかし、居住者がそのまま海士町に住むように、コミュニティの帰属意識を感じさせた方がいい。海士町には、その混合は難しそうであった。

なぜなら、Iターン者とUターン者は別々の人生経験を持っているからだ。Iターンというのは都市から田舎に引っ越すことで、Uターンは都内に勉強や仕事をしていた人が育った田舎に帰ることである。また、「IターンとはUターンと同じように田舎に戻るが、故郷に帰らないことだ」。今まで都内に暮らしていたIターン者は田舎に住むことを楽しみにしていても、恐れもあるかもしれない。一方、海士町に生まれ落ちたUターン者は家族にも幼馴染にも絆を持つ可能性が高い。このIターンとUターングループを混合するのは難しそうだが、海士町にはアイスブレイクやチームビルディングのような活動を行っているので、仲間の絆の力に頼っていた癌を持つ女の人のように、たくさんの人がコミュニティの帰属意識を感じるようになった。

次に、奈良県の曽爾村という田舎の町も居住者を引き付け始めた。私たちの授業に地域おこし協力隊に参加していらっしゃるシオリさんはその仕事について発表してくださった。曽爾村の行き先を決めたシオリさんは曽爾村の市役所にもこのプロジェクトのためきめられ、一緒に新たな居住者を集める計画を立てる話をなされた。曽爾村の美味しい野菜を食べたり、きれいな景色を見たり、空き家を直したり、引っ越しなどで手伝ったりすることも計画に入っていた。曽爾村には、I・U・Jターン者は少ないので、本当に「混合」し、シオリさんたちがコミュニティの帰属意識を感じているかどうかを確認するのが難しそうだ。

曽爾村は海士町のように混合できるかどうかわかりにくい。もちろん、移住した居住者はそのまま残るのを占うことができに。本当に時間の問題だけど、「混合」できれば、そこに移住した人々は、曽爾村に残るはずだ。